

スライドカンファレンス

<症例 1>

症 例：40 歳代，男性

既往歴：高血圧

現病歴：口腔内，右上顎部に易出血性のびらん，粘膜炎を認め当院受診．頸部に明らかな腫脹なし．

検 体：右口峡部粘膜擦過

回答者診断：尋常性天疱瘡

出題者解答：尋常性天疱瘡

解 説：好中球や赤血球を背景に，N/C 比の高いライトグリーン好性細胞や，OG 好性細胞を散在性か

ら敷石状に認めた(写真1)．ライトグリーン好性細胞のクロマチンは淡く均等分布であったが，2核から多核を有するものも出現し，1~2個の明瞭な核小体を有していた(写真2)．OG好性細胞にも核腫大や一部に輝度上昇の異型をみることから扁平上皮癌を疑い(写真3)，細胞診断は悪性疑いとした．

確認のため採取された組織生検では基底細胞層が粘膜固有層側に残存し，基底細胞が墓石状配列を呈していた(写真4)．基底細胞と棘細胞の間に水疱形成がみられ，水疱内には孤立性ないし集塊状の棘融解細胞(Tzanck細胞)を認めた(写真5)．病理組織学的所見

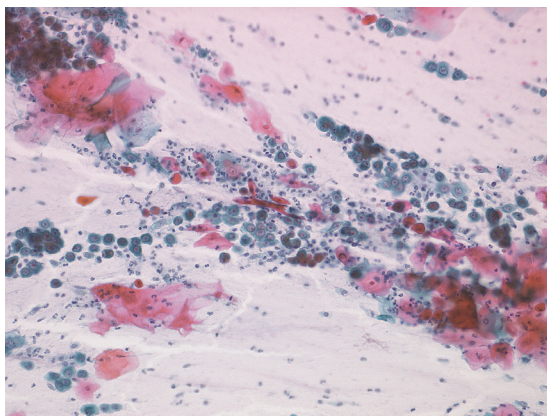


写真1 ライトグリーン好性細胞やOG好性細胞を散在から敷石状に認める (Pap.染色，×20)．

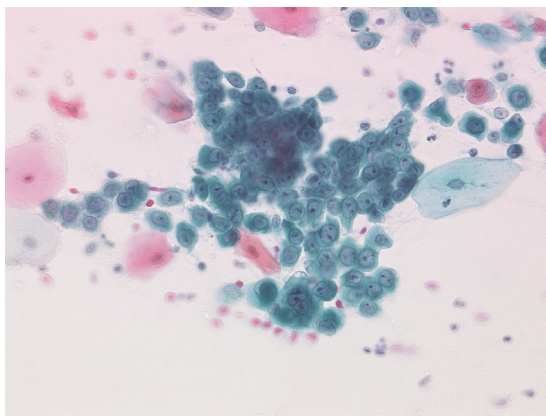


写真2 N/C比高く，クロマチンは淡く均等分布，2核から多核の核を有するものも認める (Pap.染色，×40)．

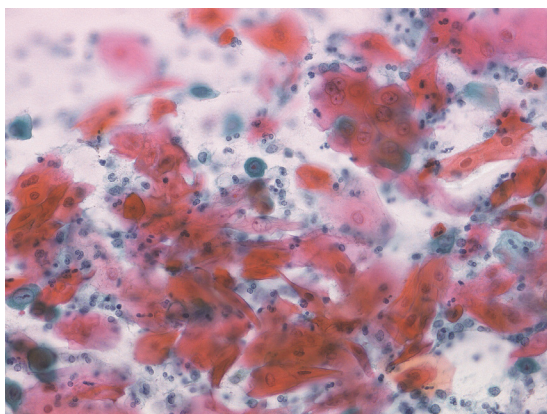


写真3 核腫大や軽度の細胞質輝度上昇を認める (Pap.染色，×40)．

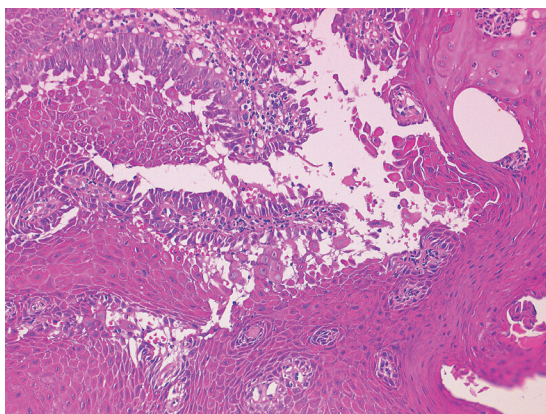


写真4 基底細胞層が粘膜固有層側に残存，基底細胞が墓石状配列を呈している (HE染色，×20)．

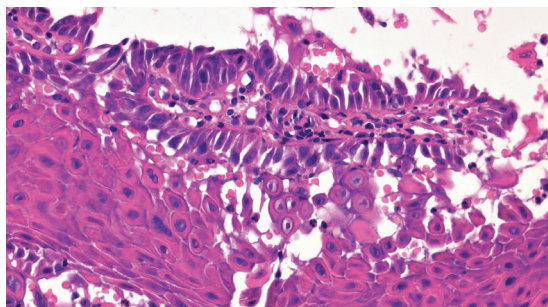


写真5 水疱内には孤立性ないし集塊状の棘融解細胞（Tzanck細胞）を認める（HE染色，×40）。

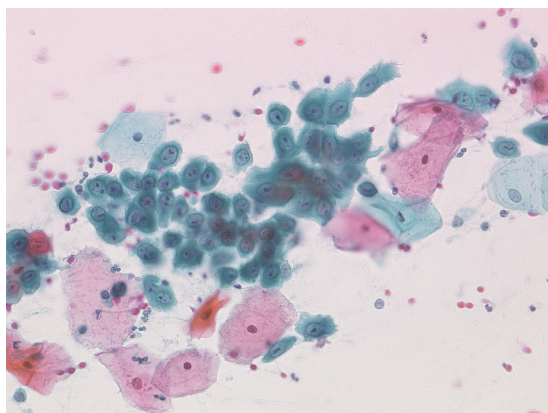


写真7 細胞質辺縁がライトグリーン，核周囲がエオジン好性の所見を認める（Pap.染色，×40）。

から尋常性天疱瘡が疑われ，血清学的にデスモグレイン3が陽性となったことから尋常性天疱瘡の診断となった。

尋常性天疱瘡は皮膚粘膜における自己免疫性の水疱形成性疾患であり，好発年齢は30～50歳代，性差はみられない。好発部位は頬粘膜とされるが舌や軟口蓋にも発生がみられる。水疱性病変だがやぶれやすく，びらんとしてみられるため水疱の存在から早期に診断することは困難となる場合がある^{1, 2)}。細胞像では比較的N/C比が高く小型で明瞭な核小体，淡く均等分布のクロマチンを有するTzanck細胞が認められる。Tzanck細胞は細胞質辺縁が濃染，核周囲が明るい淡染性を示すツートンカラーの細胞所見がパパニコロウ染色¹⁾，ギムザ染色³⁾でみられる。

細胞診標本を再鏡検したところ，背景に明らかな壊死所見はみられず，深層型異型細胞との鑑別を要したライトグリーン好性細胞はN/C比は高いものの，ク

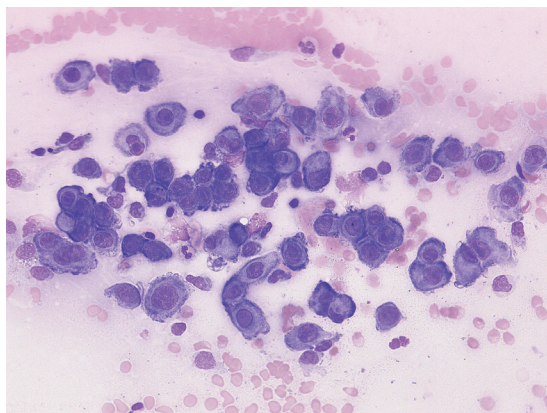


写真6 細胞質辺縁が濃染，核周囲が明るい淡染性を示すツートンカラーの細胞所見がみられる（ギムザ染色，×40）。

ロマチンの増量や不均等分布，核形不整はみられず，Tzanck細胞の所見を呈していた。また，ギムザ染色においてツートンカラーが確認され（写真6），パパニコロウ染色でも一部ではあるが同様の細胞を認めた（写真7）。OG好染細胞もライトグリーン好染細胞と同様に核腫大をみるものの，クロマチン増量や核形不整は目立たず，細胞質の輝度上昇も軽度にとどまり良性の範疇であり，尋常性天疱瘡を推定することは可能と考える。

尋常性天疱瘡においてTzanck細胞の出現は本疾患を推定する重要な所見となるが，背景に再生上皮や過角化を伴うこともあり本症例のように，異型を伴う角化細胞をみる場合，扁平上皮癌との鑑別を要する。Tzanck細胞の特徴を念頭に置き，細胞質の輝度上昇や核所見に注意し，過剰診断とならないよう注意することが重要である。

筆者らは，本論文において開示すべき利益相反状態はありません。

文 献

- 1) 久山佳代，遠藤弘康，中臺麻美，Sisilia, F. Fifita, 孫燕，加藤仁夫・ほか．剥離細胞診が有用であった歯肉に発症した水疱性疾患の3例．日口粘膜誌 2009；15：53-58.
- 2) 日本臨床細胞学会（編）．細胞診ガイドライン5 消化器．東京：金原出版；2015．42.
- 3) 太田秀一（監修），山本浩嗣，福成信博，亀山香織，北村隆司（編）．頭頸部・口腔細胞診アトラス．東京：医療科学社；2009．263.